

## 天然資源の開發に関する日米會議 水産増養殖部会 第4回合同會議 共同聲明

本回水産増養殖部会は栄養と飼料に関する國際学会との共催のもとに開かれた。會議には日・米の各委員と招へた専門家、更に英國からの参加者も加えて、総勢10名を超え盛會裡に終了した。発表された論文は6ヶ月以内にテラリアエ大学から出版されることになる。

貝類の疾病に関する共同研究は昨年の第3回部会で開始され、本年はシンダーマン委員と小金沢委員が相互の研究調整にあたりこととなった。本回部会ではシンダーマン委員は米国西海岸沿いのマガキの疾病について報告し、小金沢委員は日本産カキの組織標本を持参し、共同で調査することとなった。更に小金沢委員は共同研究の持ち方を検討するため、現在オックスフォード研究所に滞在中である。次年度FAO主催の水産増養殖會議が開催されるが、部会として日米におけるカキの疾病について論文を呈出する。なお、小金沢委員は水産庁にこの旨連絡をとることもなった。

アルテミア卵の不足と孵化率の低下により、日米両国の水産増養殖の諸活動が困難になってきている。このことについて日本側委員は更に詳細な情報の提供方を求め、米国側委員は将来の展望も含め、米国における最近の供給状況の實態を明らかにすることとなった。

日本側委員から前回日本で部会と共催した“魚病シンポジウム”の記録は印刷が終了し、発送段階にある旨報告され、さらに発送方法について最終調整が行われた。

日本の水産増養殖に関する出版物“浅海完全養殖(今井文太郎編)”の英訳は終了し、現在最終校正段階にある旨報告された。

提案課題として、“水産増養殖”に関する出版物を部会として考慮すべきであるとの意見が出され、両側委員は最近の進捗の状況、文献を含めた出版物が必要であることを認め、次期部会で具体的に討議するととした。

研究者の交流は成切裡に進められている。日本側小金沢室長は現在米国沿岸漁業局オックスフォード研究所に滞在しており、又日本にはテラリアエ大学セント・ジョイス教授を派遣することを決断した。部会としては此の種の研究交流を今後とも支援することとした。

第5回水産増養殖部会はFAO主催の水産増養殖会議開催日(1976年5月26日～6月2日)の前後に日本で開催することとし、両国委員長は会議日程を調整する。尚日本側委員は米国側委員のFAO主催の会議及び部会への参加について協力する。なお次期議題は日米それぞれ最近の研究状況と将来について概説し、特に米国側では海洋開拓研究の中における水産増養殖の諸活動力について詳細に紹介することになった。

第8回日米天然資源開発に関する委員会は1975年11月6日～7日、ワシントンD.C.で開催される。席上、水産増養殖部会の活動が各コーディネーターに報告されるが、本部会として、水産増養殖部会への一助の支援を要請することになった。

1975年10月16日

於：デラウェア、レノックス

William N. Shaw

米国側部会長

William N. Shaw

Y. Tsukamoto

日本側部会長

古川 厚